

トビウオ通信 (H19 第8号)

http://www.pref.shimane.lg.jp/suigi/ (TEL 0855-22-1720)

《平成19年度下半期浮魚中長期漁況予報》

平成19年10月に那覇市において、東シナ海～日本海西南海域にかけての対馬暖流域における主要浮魚類の長期漁況予報会議が開催されましたが、その会議内容をもとに平成19年度下半期(11～3月)の中・長期的な漁模様の予測をします。

漁況(来遊)予報(平成19年11月～翌3月)

マアジ:前年、平年並み マサバ:平年を上回り、前年をやや下回る

カタクチイワシ:平年を上回る ウルメイワシ:平年を上回る マイワシ:極めて少ない

※平年：過去5カ年の平均値

マアジは前年、平年並み

沖合域(対馬周辺～東シナ海)は低調

平成19年1～9月までの対馬周辺～東シナ海における大中型まき網漁業によるマアジの漁獲量は1万7千トンで、平年同期(過去5年平均)の50%、前年同期の59%と近年では最も低い値となりました(図1)。これは、燃油高騰により東シナ海南部への出漁が減っていることや比較的好調なサバ類へ漁獲が向いていることによりマアジに対する漁獲努力量が低下している影響もありますが、対馬暖流域のマアジ資源自体が減少傾向にあることが最大の要因であると考えられます。従って沖合域の漁況は今後も低調な傾向が続くと推定されています。

今後の漁況

島根県における平成19年のマアジの漁獲量はこれまで平年、前年同期を上回り比較的好調に推移しています(図2)。今後の島根県沖におけるマアジの見通しですが、夏季に水産技術センターが鳥取県等と共同で実施した中層トロール網による加入量調査の結果(※詳細は同報6号参照)から、今後の漁獲

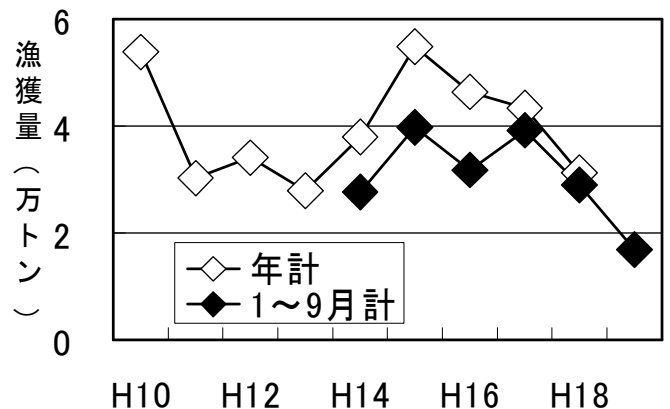


図1 東シナ海における大中まき網によるマアジ漁獲量

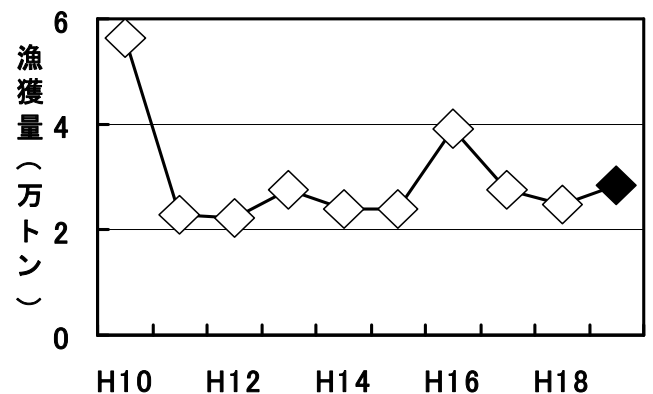


図2 島根県中型まき網におけるマアジ漁獲量 (H19は1～9月の集計値)

の主体となってくる当歳魚（H19 生まれ）の資源水準は、来遊量の多かった平成 15 年に次いで 2 番目に高い水準にあると推定されています（図 3）。今のところ当歳魚の漁獲量は例年に比べて多くはありませんが、今後、来遊量が増加する可能性もあり、ある程度は期待できるとものと考えられます。東シナ海～日本海西南海域における 1 歳魚の資源水準については前年並みと予測されていることから、今後のマアジ全体の来遊量は前年、平年並みであると予測されます。

現在、南米ペルー沖の海面水温が下がり世界的な異常気象をもたらすとされる「ラニーニャ現象※」が発生し、来年春まで続く可能性が高いとされていること（気象庁発表）から、この冬の気温は低めで推移する可能性があります。しかし、西部日本海における 11 月現在の沿岸の海水温は依然高めで推移しており、このまま昨年のように暖冬で穏やかな海況が継続した場合は、操業日数の増加により漁獲量は前年、平年を上回る可能性もあると考えられます。

マサバは平年を上回り、前年をやや下回る

沖合域（対馬周辺～東シナ海）は前年を上回る

東シナ海～日本海南西海域における大中型まき網によるマサバの漁獲量は、近年は低位横這いで、資源水準は依然として低い状態にあります。平成 19 年 1～9 月までの対馬周辺～東シナ海における大中まき網漁業でのマサバの漁獲量は約 2 万トンで、平年同期の 109%、前年同期の 123%となりました（図 4）。

今後の漁況

島根県における平成 19 年のサバ類の漁獲量はこれまで平年、前年同期を上回って推移しています（図 5）。しかしながら、秋漁（9、10 月）についてはこれまでのところ平年の 1/3 程度の漁獲量と低迷しています。

今後漁獲に加わる 0 歳魚（H19 生まれ）および 1 歳魚の東シナ海～日本海西南海域における資源水準は、概ね前年と同程度と推定されていることから、今後の島根沖におけるマサバの来遊量は、漁場形成により地域差が生ずる可能性はありますが、全体としては平年を上回り、好調であった前年をやや下回ると推測されます。

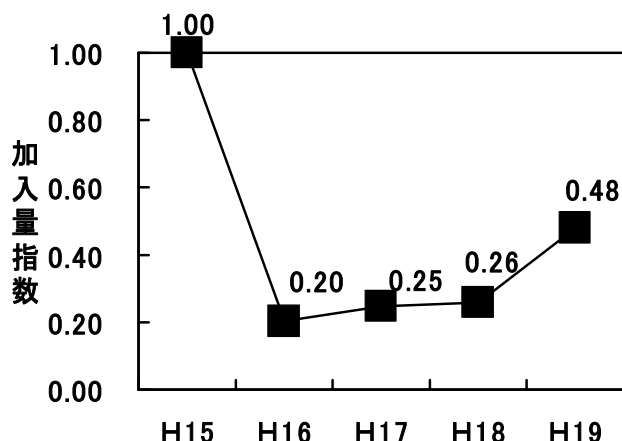


図3 山陰沖海域におけるマアジの加入量指数（資料：鳥取県水産試験場）

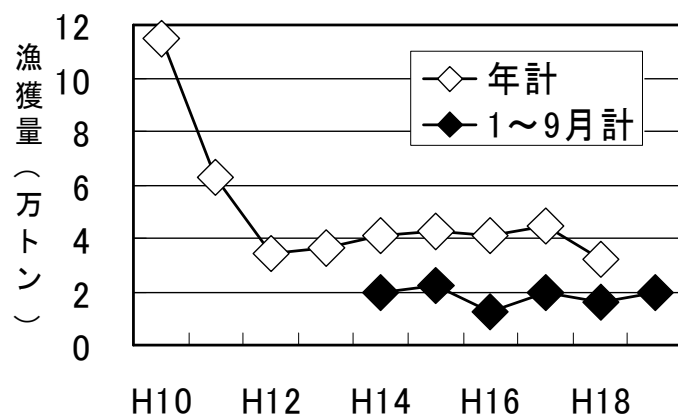


図4 東シナ海における大中まき網によるマサバ漁獲量

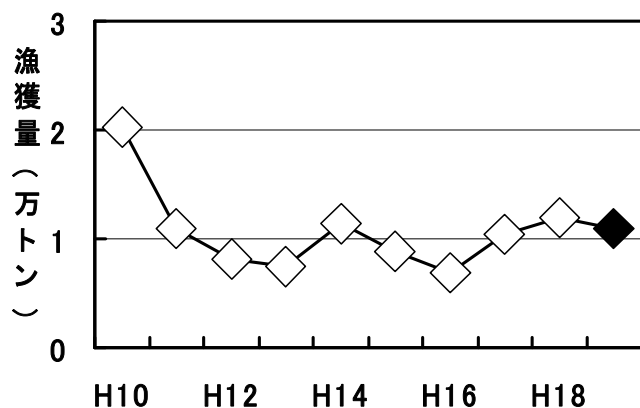


図5 島根県中型まき網におけるサバ類漁獲量（H19は1～9月の集計値）

カタクチイワシ、ウルメイワシは平年を上回る

島根県の中型まき網によるカタクチイワシの漁獲量は、平成13年に漁獲が大きく落ち込んで以降5千～1万トン前後を増減しながら低調に推移しています。平成19年1～9月までの漁獲量は約1万1千トンで、平年同期の128%、前年同期の121%と前年に引き続いてやや増加傾向となっています(図6)。九州沿岸から日本海にかけての海域における当歳魚の加入状況は良好であると推定されていることから、今後の島根沖におけるカタクチイワシの来遊量は、概ね平年を上回って推移すると考えられ、漁場形成によっては、比較的好調であった前年を上回る可能性もあります。

島根県の中型まき網によるウルメイワシの漁獲量は、平成16、17年は好調に推移していましたが、平成18年は減少しました。平成19年1～9月までの漁獲量は約4千7百トンで、平年同期の117%、前年同期の148%と比較的好調に推移しています(図6)。九州沿岸から日本海にかけての海域では来遊量が平年を上回ると推測され、島根県の中型まき網においても直近の10月にまとまった漁獲があったことから、今後の島根沖における来遊量はカタクチイワシと同様に概ね平年を上回って推移すると考えられます。

マイワシは依然として極めて低水準

島根県の中型まき網における平成19年1～9月までのマイワシの漁獲量は約3千百トンで、平年同期の約5倍、前年同期の約2倍と好調に推移しましたが(図6)、平成15年以降、5年連続して増加傾向が継続していますが、過去の高い時の資源水準と比較すると依然として極めて低い状態にあります。今後も増加傾向は継続する可能性は高いもののまとまった漁場形成は見られず、散発的に沿岸域で漁獲される程度と考えられます。

※ 「ラニーニャ現象」

太平洋赤道域の中央部(日付変更線付近)から南米のペルー沿岸にかけての広い海域で海面水温が平年と比べて低くなり、その状態が1年程度続く現象(エルニーニョ現象と逆の状態)。異常気象の一因と考えられている。ラニーニャ現象が起これば、日本付近では東日本、西日本の夏の気温は平年並みから高め、冬の気温は平年並みから低めとなる傾向がある。

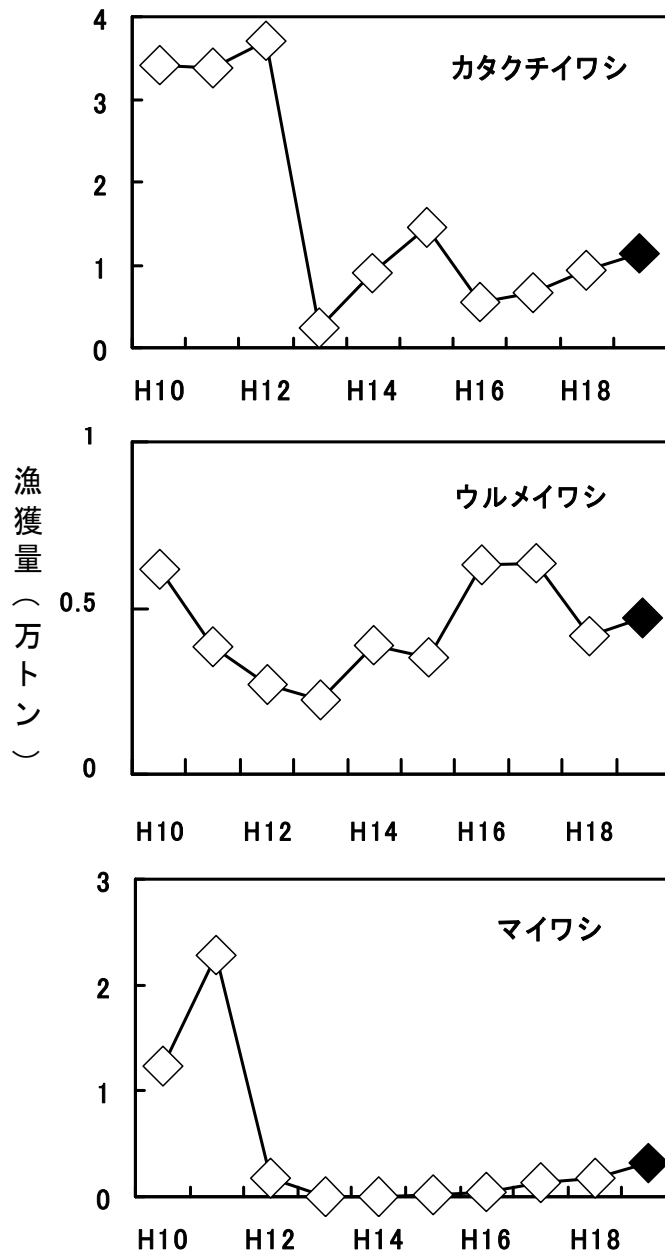


図6 島根県中型まき網におけるイワシ類漁獲量 (H19は1～9月の集計値)